

保育計画の構造化に関する研究（1）

－「保育構造」論の検討－

師 岡 章

（東立川幼稚園）

はじめに

保育の目的を具体化し、その目的を達成するための保育内容を組織及び配列する保育計画は、確かな実践を望むための青写真として必要不可欠なものである。

しかし現在の保育現場では、教育要領および保育指針の改訂に伴い、その在り方をめぐって様々な混乱が生じている。特に、保育計画の構造化は保育者の指導性の問題が否定的に扱われる風潮と呼応して批判的な評価（例えば、高杉・平井・森上編著、『89 幼稚園教育要領の解説と実践(2) 幼稚園教育の内容』、小学館、1989年における森上氏の発言）をされてきている。

こうした現状をふまえ本研究は、保育計画の構造化の意義を見出し、実践への展開を進める上での視座を確定したいと考えている。そこで(1)では、これまでに保育計画の構造化を試みた「保育構造」論の中から、理論と実践の統一を試みる中で提唱されたものを取り上げ、その意義や内容の分析をするものとした。

1 久保田浩氏の「保育構造」論

『保育原理』（梅根悟編、誠文堂新光社、1968年）の中で「構造のある計画」化をとえ、「保育構造」論の先鞭をつけた久保田氏は、続く『幼児教育の計画－構造とその展開』（誠文堂新光社、1970年）の中で「教育計画の構造（生活の構造）」を明らかにした。

この構造は、一貫して「生活教育」の立場に立つ久保田氏自らが関わった和光学園及び白梅幼稚園の保育者との協力のもとにつくられ、「幼児の生活づくり」のため「その構造と内容をさぐりだし、発達の段階にそって、方向づけをし、くみだてていく」という方針のもと、下図のような三層構造として提示された。

第 3 層	領域別活動 －系統を主にする活動	あそびや生活をたかめ、た だしい発達をうながす活動 (自然・数・算・言語・文学・造形・音楽など)
第 2 層	中心になる活動	生活の中核になるようなあ そびなどを再構成し単元化 したもの(集団あそび・行事活動・じと)
第 1 層	基底になる生活	生活全体をなりたいたせるた めに必要な基礎になるもの (自由あそび・生活指導・集団づくり・健康管理)

これら「三つの層」は、それぞれが「バラバラにあるものではなく、相互にかかわりあい、力動的にはたらかけながら、生活の内容をかたちづく」という有機的な関連性を持ち合うものであった。

この点を事例（猪狩富貴子、『白梅の教育』－実践記録第6集、白梅幼稚園、1973年）をもとに見てみると、例えば4才児・9月下旬に実践された「紅白リレー」は、1学期から自由な場面でやりたい子どもがリレーごっこを楽しんでいる姿を土台に、2学期は「集団をかためて」いくことをねらいとしてクラス全体での組織的な遊びとして取り上げたものである。この中では先のねらいのもと、バトンの渡し方などの技術の問題や必要なルールも投げかけられ、後のプレイディや自由あそびにつながっていったことが報告されている。ここには、基底になる生活→領域別活動→中心になる活動→基底になる生活という展開が見られる。もちろん場合によっては、「基底になる生活→中心になる活動→領域別活動→基底になる生活」という展開もあり、一概に第1層から第2・3層と積み上げるような段階的な展開ではなく、多様な在り方が考えられている。

このように三層構造は、当時支配的であった「幼稚園教育要領を絶対的なもの」とする六領域主義に対し「教育課程の自主編成」を進めようとする立場から、単に保育内容や領域を同列に扱うのではなく、「多彩であり、変化にとんだ」生活全体を「質がちがひ、次元のちがう活動」として三層に整理し、その中核に目的的な活動である「中心になる活動」をおきながら各層が複雑に絡み合う関係を明らかにした『保育構造』論であった。この点は、今日でも問題となるディリーププログラムの中で各層を時間割りによりコマ切れ指導をする『保育構造』論の解釈をも否定するものである。

以上、久保田氏の『保育構造』論は、子どもたちに「『みんなと生活すること』のねうち」を知らせることを理念とした上で、「生活そのものをかかんがえる」『生活の構造』論を提起したと言えるものであった。

2 大場牧夫氏の『保育構造』論

久保田氏に続いて、実践の理論化としての『保育構造』論を展開した大場氏は、日頃実践する桐朋幼稚園での取り組みを整理することを試み、当初は久保田氏

の三層構造と同じような構造性を模索して「二層構造的カリキュラム」の作成に取り組んだが挫折（桐朋幼稚園編、『桐朋幼稚園の教育「生活するカーその育ちの追究」』、1989年）。以後、その方向を保育者からの「働きかけの構造」にしばることにより、久保田氏と異なる三層構造を提起した。

この構造は、『保育の実践と理論』（大場牧夫編、ひかりのくに、1969年）でまず発表され、続く『幼児の生活とカリキュラム』（大場牧夫編著、フレーベル館、1974年）及び『新版幼児の生活カリキュラム—三層構造的な生活プラン』（大場牧夫編著、フレーベル館1983年）の中で深められ、下図のような「三層六領域構造」として提起された。

選定された課題による活動					
遊 び					
生 活 と 仕 事					
健 康	社 会	自 然	言 語	音 楽	造 形
個人・集団の変革					

（『新版幼児の生活カリキュラムより』）

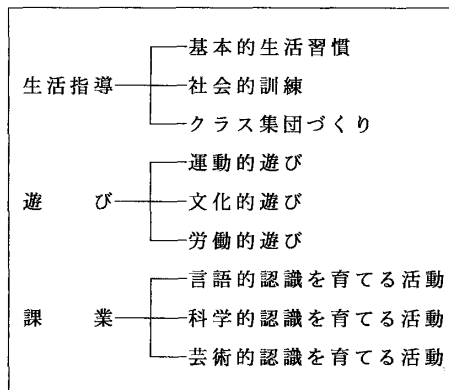
この中で「各層は相互に密接な関連をもっている」と捉えられ、六領域も教育要領や保育指針のものを「意味しているのではなく、もっと自由に幼児の成長発達に必要な経験・活動」を整理する中で「仮説的に位置づけようとしたもの」にすぎないとされている。

このように「今、目の前にいる幼児たちに何が必要なのか」という点から出発し、そのために必要な経験や活動を整理した大場氏の『保育構造』論は、子どもたちが「園生活での生活主体者」となるために必要な保育者からの「働きかけ」を明らかにした『指導の構造』であったと言える。そして現在、この「働きかけの構造」は、「型にはまったような実践」とならないために、園生活全体をイメージしていけるような「園生活の構造化」としての方向を示し、特に課題活動に関わる「総合性」の検討のもと、新教育要領のねらいや内容との関連も試みた構造を提示（日本幼年教育研究会編、『新幼稚園教育要領研究2 新幼稚園教育要領の内容と解説』、明治図書、1989年）するに至っている。

3 田代高英氏の『保育構造』論

保育研究者である田代氏は、『現代幼児集団づくり入門』（東方出版、1974年）の中で「集団づくり」の捉え方の枠組みを提示して以来、集団主義の立場から常に保育現場との共同討議を繰り返し、久保田氏や大場氏とは異なる『保育構造』論を展開してきた。

特に、福岡教育大学附属幼稚園の保育者と作り上げた保育カリキュラム（『季刊保育問題研究』75号、



新読書社1981年）は、左図に示すように田代氏が『保育計画の構造化』（『季刊保育問題研究』6

8号、新読書社、1979年）で提起した「保育目的と関連して、保育内容、すなわち、具体的な保育内容の分野」を検討する中で提示されたものであった。

そしてこの構造は、『保育入門』（穴戸健夫・田代高英編、有斐閣、1979年）で示されたように「基礎的諸能力」や「自主的、民主的人格」の発達保障のためには、基本的視点として「集団生活の形式や内容」の見通しが必要であるとする方針のもと、その発達のすじ道を示す「保育計画の系統性」を重視する中で、保育者からの働きかけの要点を示したものであった。

以上田代氏の『保育構造』論は、背景としては先の両氏と同様に六領域主義への批判を中心にした「保育計画の自主編成」の必要性を説きながら、保育者が子どもに対する課題を達成するために必要な「具体的な活動を配列」を積極的に進めた『保育内容の構造』であり、それ以降の「仕事」や「課業」の重視した『保育構造』論の先鞭として位置づくものであろう。

4 まとめ

以上、『保育構造』論は、一概に構造と銘打ってもその立場により、保育内容の諸要素を構成し直したもののから、それらをトータルにまとめていくことを意図したものまでと、多様であることがわかる。

しかし、構造論であるかぎり、やはり単なる保育内容の組み替えや新たな要素の抽出に終わることなく、それらをトータルにまとめあげる作業が今後の課題となろう。

ただし、各『保育構造』論が共通して保育計画を、上意下達式でなく自主編成により進めていくことを提示していることは重要な指摘である。このことを念頭に今後は、先の課題を解明していくこととしたい。